

「対話、度胸、想像」

繁野玖美 作業療法士

今日の講義で感じたことを書きます。

まず、『ジャーナリズムは開かれている、アカデミズムは閉じられている』と感じました。開かれていると対話につながります。しかし、閉じられているとそこでおしまい、それでは何のための学問なのかと憤りを覚えます。

そして、京都大学杉山幸丸博士のハヌマンラングールの子殺し研究、そこからわかった『利己的遺伝子』。これは強く印象に残りました。人間もその他の動物も自分の遺伝子を生かすために『利己的遺伝子』が働くのは仕方のないことだと思います。しかし、人間には高い知能があり、恐ろしい兵器をつくることもできます。

「自分だけ、自分の仲間だけ、自分の民族だけ、自国だけ」という発想を一国のリーダーが持った場合、それはいずれ人類そのものを滅亡に導くことでしょう。

残念ながら、今、私たちはその瀬戸際にいると感じます。

しかし、自分の遺伝子を生かすためには、考え方が異なる相手であっても共存の道を選ぶ方がはるかに有利なはずです。それはこれまでの歴史をみれば自明の理です。何故、それができないのでしょうか？

きょうの講義には共存のためのヒントがありました。

一つは『対話』です。奈良里紗様は『こたえのない対話』とおっしゃっていました。結論を出すためではなく、相手の話を聴くための対話。佐々木信夫様は『私は何をしてほしかったか』という、私の話を聞いて私の疑問に付き合っただけでよかった。それだけあればよかった』と話されていました。

そして、『度胸』。今日の講義にはこの言葉がたくさん出てきました。世の中を良くするために、これまで誰もしてこなかったことをするのですから度胸が必要です。

そして、バンクミケルセン様の『想像』。「自分自身が、そのような状態におかれたとき、どう感じ、何をしたいか、それを真剣に考えることです。そうすれば、答えはおのずから導き出せるはずです」。

あっという間に2023年後期も終了してしまいました。お名残惜しいです。私にとっての今期の学びは、「自分を生かすことは他者を生かすこと、そのためには『対話』、『度胸』、『想像』を忘れない」ということです。

来年度の講義を楽しみにしています。ありがとうございました。

